

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年6月30日(月)

みんなの居場所

「狭い」気持ちの余裕

6月、梅酒を仕込んだ。我が家は私の両親を中心に、歳時記に記された季節折々の風物を楽しむ。私の両親はそれによって季節を感じる事が楽しみなようだ。私が梅酒を造り始めたのは15年ほど前のことだ。当時の勤務校に大きな梅の木があり、毎年、粒の大きな梅が駐車場に落ちていた。回でも、梅酒にはもってこのサイズだから、私がチャレンジしてみることになった。勤務が終ると梅の木に登る私...遠くから見れば不審者!!最初に梅酒を造ったのが「キナーズラック」なのだが、これもいつか「味を占め、その後作り続けることになった」。しかし、平成28年度は、忙しくて熊本地震で梅酒を仕込む気にもならなかった。兎に角、平成28年度は私にとっては激動の年であり、何かを楽しむというふうな心の余裕はなかった。平成29年度から少しずつという余裕が生まれるようになり、以降また歳時記を楽しむようになった。難しいが最近では梅干しにも興味を湧いている。

気持ちの余裕を作るには、仕事へのモチベーションを上げることに直結する。精神のバランスを積極的に「とる」とも、我々教師の重要な仕事であるような気がしている。要は気持ちの持ちようだ。すなわち意識改革である。昨年は、仕事と遊びのバランスが崩れ体調不良に繋がった。今年こそは、楽しみを探している。

目指す理想的な学び〜目指す学び取る〜

本校では「これまでの学びのスタイルを、子ども達が将来必要な力を身に付けるための形に変える」ということに取り組んでいます。これまでの授業スタイルはどちらかというと、「一斉教授型」で子ども達にとっては受け身の学習スタイルでした。これを子ども達自身が「自ら学び取る」というスタイルに改革しています。もちろん、私達は教師ですから教えるべき事は徹底的に教えますが、子ども達が自ら学び「主体的な学び」は知識として定着しやすい生活に活かすことができます。

このような学びが必要なる理由としては子ども達が現役時代として活躍してもらうためには、ならない社会で必要な力を身に付けさせるためです。近い将来、A（人工知能）が多くの仕事を担うようになるという予想がなされていて、今ある仕事の半分ほどがAに奪われてしまうという現実が待っています。新たな仕事を探さなければならぬ訳です。平たい言葉で表現するなら「...」「何を仕事にしたいのか」「これは不便だな」「この不便を解消する」と私の仕事に「よう」という興味をもち、更に申し上げるならば、企業が求めている素養は、創造性・想像性、バイタリティ、「コミュニケーション能力」、グローバルティ等々であり、そのような力を組織的、段階的に身に付けさせていくのが学校教育なのです。

府本小学校では、教職の経験の深淺に関係なく質の高い学びが保障されることを目指しています。そのためには、まず教師との信頼関係を構築することが大切だと考えています。また、新しい学びのスタイルを機能させるためには、教師と保護者の皆様、地域の皆様との連携も必要です。学力向上は短いスパンで実現するものではありません。しかし、子ども達に関わるすべての人が、絶対に学力を向上させるという強い意志をもつて取り組むよう実現が早まると思います。

シリーズ「自分を語る」#23

部活動一色だった大学時代ですが、先にも述べた通り、もう一つのめり込んだのはバイクです。私が大学に入学した頃は、空前のバイクブームの時代でした。高校時代からバイクに乗る仲間が多くて、原付に飽き足らず、16歳になったらすぐに、自動二輪の免許を取る者もいました。一度、週刊マガジンという雑誌には「バリバリ伝説」というバイク漫画が連載されており、夢中になって読んでいました。実はその単行本も、就職してから古本屋に買いに行き、全巻揃えるといういわゆる「大買い」をしてしまいました。この漫画の中で、三重県鈴鹿市にある鈴鹿サーキットの「4時間耐久オートバイレース」「8時間耐久オートバイレース」が描かれており、それを観に全国からライダーがやってくるという現象も起っていました。私も観に行きたかったのですが、どうしても日程が合わないことが多く、行けませんでした。

バイクをこのようにして手に入れたのももちろんバイクです。当時、親からこう言われていました。「中古の軽自動車だったら買ってもいいよ」「私は、当然「バイクは買おう」と頼みましたが、無理でした。程なく、フルバイクの日々が始まります。部活があるのも、バイクは夜間が多かったですね。家庭教師は4年間を通じてやっていた。変わったバイクは、劇場の宣伝車の運転「なんてもありました。そこで働いておぼろげな仲良しになって、煙草を買ったりしていました。あと、英語スクールのボスターを電柱に貼って歩くというバイクもいました。貼る時の姿から、私達は「バイクを「セリ」と言っていました。他にもいろいろなバイクをしましたが、今考えてみると、バイクは、お金を報酬として頂くというこの厳しさを味わった貴重な体験だったと思います。

そうしている間に、両親から「一本電話があり」幾ら貯まったか」「言わば、ほらほらと喜んでいます。すると「援助してやるか」「言わば、すぐに飛びつきました。ところが、2年の夏、念願のバイクがやっとできました。Honda CB400F」と言いつて分る人は、私、同世代ですね。

バイクで色々なところに行きました。いわゆるツーリングです。初ツーリングは、北海道でした。部活の仲間と「二カノ下道」(峠道に乗り出す)で、日本最北端(宗谷岬)と最東端(納沙布岬)に行こう」という目標をスタートしました。さすがに疲れましたね。この時は、そして、3年時にはフェリーを使って北海道に上陸、前の年に楽しめた景色を楽しむながら走りまわりました。この2回のツーリングは、親戚宅に泊まる以外は全て、野宿で、最長で10日間風呂に入らなかつたことがあります。公園や橋の下で野宿するのです。公園には水道もあるので、よく水浴びをしました。橋の下は雨雲が流れるので心地よかったですね。3年次の冬は四国を8の字に一周するツーリングもしました。このツーリングは過酷でした。厳冬の四国山地では、凍死かと思いましたが、体を温めるためにウィスキーを飲んだりしていました。実はそれが逆に危険だという認識を持てたのは、社会人になってからでした。(つづ)